

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月4日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009年度～2011年度

課題番号：21520810

研究課題名（和文）現代イギリスのパキスタン系ムスリム女性の就労意識と実践

研究課題名（英文）WOMEN AND WORK: PERCEPTIONS AND PRACTICES AMONG PAKISTANI MUSLIM WOMEN IN CONTEMPORARY BRITAIN

研究代表者

工藤 正子 (KUDO MASAKO)

京都女子大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：80447458

研究成果の概要（和文）：

52名の女性（主に2世）を対象にバーミンガム市で行った調査の結果から、パキスタン系女性の就労率は上昇しているものの、学校教員などの女性化された職種に集中する傾向があることが明らかとなった。その背景には、女性の就労をめぐる複雑な交渉の過程があり、女性のケア役割を強調する宗教的文化的なジェンダー規範や、教育レベルの上昇、その結果として獲得された社会的言語的な資源等の諸要因が絡まり合っている。労働市場での差別や、マイノリティ政策、経済変動等も影響しており、さらに、これら諸要因と女性の就労意識や実践との相互作用は、家族状況やライフサイクルにも左右され、多様かつ動的な様相を呈している。

研究成果の概要（英文）：

The bulk of research was conducted in the city of Birmingham. The research participants were recruited through the snow ball method and a total of 52 women were interviewed. The majority were second generation British citizen. The research findings suggest that while the rate of labor participation among British Pakistani women increased over the last two decades, the preferred occupations tend to be such female-dominated ones as school teacher. This reflects the complex processes in which the women negotiated their desire/need to work outside the home. The processes were interwoven with factors such as the religio-cultural gender ideals which prioritize caring roles as mother, wives and in-laws, their educational attainment and the resulting socio-linguistic resources that second-generation women came to possess. Racial and religious discrimination against minority women in the labor market, governmental policies targeting ethnic minorities, and the changing regional, national and global economic environment are other factors affecting the women's work trajectories. It should also be noted that the degree to which these factors affected women's practices and perceptions regarding work depended on variables including their family background and life cycle.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：労働、女性、移民、マイノリティ、ムスリム、宗教、イギリス、パキスタン

1. 研究開始当初の背景

イギリスのエスニック・マイノリティのなかでも人口規模が大きいパキスタン系移民は、バングラデシュ系移民とならんで、イギリス社会の経済階層の底辺にあり、しかもその位置は、現在も世代を超えて再生産されていることが指摘されてきた。一方で、労働者を親にもつ第二世代では教育レベルが上昇し、移民コミュニティ内部でも社会経済的地位が分極化している。さらに注意すべきは、パキスタン系移民女性においては、主流社会からの差別のみならず、エスニック集団内部でもジェンダー差別を経験し、ジェンダーとエスニシティが交差する多重の周縁性を抱えていることである。

こうした移民女性の新たな世代が、主流社会にいかにか包摂または排除されていくのかという問題は、多文化化が深化する西欧諸国において強い関心を集めてきた。しかし、パキスタン系ムスリム移民の第二世代の女性たちは、「抑圧された犠牲者」、または、公教育をとおして白人社会の価値観に同化していく存在、といった単純な枠組みで見られる傾向があり、主流社会やエスニック・コミュニティ、家庭という重層的な生活世界を生きる彼女たちの複雑な価値観の形成プロセスは見落とされてきたといえる。

以上のような背景から、本研究は、パキスタン系ムスリム移民2世の女性たちの就労をめぐる意識と実践に焦点をあて、働くことをとおして、彼女たちが社会における自己の位置をいかにか認識し、そこでどのような居場所を拓いていこうとしているのかを当事者の視点から明らかにする。

2. 研究の目的

本研究は、イギリスのパキスタン系ムスリムの第二世代の女性たちを主な対象とし、彼女たちの就業にかかわる意識と実践を明らかにするものである。とくに、1) 多文化社会を生きる女性たちがおかれた構造的な位置に、世代、階層、ジェンダー、エスニシティ、宗教などの複合的な差異や力関係がいかにか相互に作用するのか、2) そこで女性たちがさまざまな諸条件に制約されつつ、「働く」ことを主体的にいかにか意味づけ、どのような「働き方」を切り拓いているのか、という2つの問いをたて、詳細な聞き取り調査および文献調査の結果から考察を行った。

3. 研究の方法

本調査は、以下の4つの柱のもとで行われた。

(1) 主にパキスタン系ムスリム女性を対象とした聞き取り調査（調査対象者の詳細については、下記*参照）、

(2) 日本およびイギリスにおける関連分野の研究者らからの情報収集および意見交換、

(3) 文献および統計資料の収集と分析、

(4) 学会や研究会での発表等をとおした理論枠組みの発展と修正

*上記(1)の聞き取り調査の概要：

聞き取り調査は2009年度～2011年度の3年間に、毎年3～4週間程度の聞き取りを行った。雪だるま式に調査対象者を募り、主にイギリス中部のバーミンガム市において計52名から聞き取りを行った（うち15名は複数回にわたり聞き取りを行った）。その過半数は、イギリス生まれの2世で既婚であり、年齢層は20歳代～40歳代が中心である。

また、これらの女性たちのほか、同市において、移民支援団体の代表者やムスリム女性の支援やエンパワメント運動に関わっている女性、市役所でマイノリティ政策に携わっている担当者に対しても、パキスタン系ムスリム女性の家族関係や、結婚、教育、就労をめぐる状況および関連する諸政策等について聞き取りを行った。

4. 研究成果

調査結果より、以下の点が明らかとなった。

(1) 女性化された職種への就労傾向

パキスタン系女性の就労率は全体で見れば、他のエスニック集団と比較して低いものの、第二世代の女性たちの間では就労率は上昇している。しかし、聞き取りした女性たちの就労職種をみると、中間層については、学校教員や、主に移民女性を対象に支援活動を担うコミュニティ・ワークなど、女性化された特定職種への集中の傾向がみられた。また、移民コミュニティ内での特に女性を顧客とする業種での起業、またはそれを企図するケースも少なくない。こうした女性化された領域への集中については、雪だるま式で調査対象者を募ったことを考慮に入れる必要はあるが、研究者や支援団体などへの聞き取りや、在英ムスリム移民女性についての先行文献においても指摘されている。

(2) 背景要因

上記(1)のような状況の背景には、以下のような複合的な要因が絡まり合っている。

① 宗教的文化的なジェンダー規範

パキスタン系コミュニティにおいては、男女、とくに成人女性と親族以外の男性を空間的に分離するという男女隔離のジェンダー理念が存在し、この理念にもとづく女性たちの振舞いや行動は、女性自身のみならず、移民コミュニティにおける家族や親族集団の名誉をも左右するものと認識されている。また、パキスタン系女性は核家族の範囲を超えた広い親族集団の関係の網の目のなかで生活しているケースが多く、妻、母、義理の娘などの立場で家族を世話する役割も、女性としての地位や自己規定のなかで重要な位置を占める。パキスタン系移民1世が高齢期を迎えていることから、子育てにくわえ、高齢者介護も女性たちの大きな関心事となりつつある。

一方で不況が長期化し、また、教育費等の高騰もあり、既婚女性が家外で働く必要性はますます高まっているが、こうした状況のなかで、女性たちは、男女隔離やケア役割というジェンダー規範を逸脱することなく、家外での就労を可能にする職種や労働形態を注意深く選択しており、その結果が女性化された特定職種への集中に反映されているとみることができる。

ただし、こうしたジェンダー規範への意識や実践は、階層や世代などによって異なることに注意が必要である。また、2世の女性たちはパキスタンの「文化」と、イスラームにおける宗教的なジェンダー理念を区別する傾向にあり、この点は母親世代と大きく異なる。中間層の2世の女性たちの間では、イスラームのジェンダー理念として、妻の家内のケア役割と夫の扶養役割という明確な性別分業を強調するだけでなく、女性の「自律性」をも重視する傾向がみられた。基本的な生活費用を稼ぐのは夫の責任とし、妻の稼ぎは、高騰する教育費用等に充てるのみならず、妻の「自律性」を実現するためにも重要とする女性が少なくなかったことが指摘できる。

② 教育レベルの向上

女性の就労率の上昇の背景の一要因には、大学進学率がイギリス社会全体だけでなく、エスニック・コミュニティ内でも大きく上昇してきたことが挙げられる。

さらに、女性の教育については、主流社会から描かれてきたムスリムの親のステレオタイプとは対照的に、イギリスで単純労働に従事してきた1世の父親が娘の進学を後押し

してくれたというケースは少なくなかった。一方で、イギリスの教育システムについての親の知識や社会関係資本の欠如、移民の子どもに対する教師側の偏見などによって、学業において自分の可能性を十分に伸ばせなかったと感じる女性たちも多かった。しかしながら、イギリス生まれで公教育を受けた2世の女性たちが、公教育、とりわけ高等教育への参入により、言語資本のみならず、主流社会の制度についての知識などを獲得し、就業において、母親世代や新たに移住してきた婚姻移民の女性たちよりも有利な立場にあることは確かであろう。

③ マイノリティ政策

学校で教員やその他のスタッフとして働く女性たちの勤務校には、南アジア系の生徒がかなりの割合を占める場合が少なくない。また、コミュニティ・ワークに就く場合も、エスニック・マイノリティ、とくにパキスタン系を中心とするムスリム移民女性を対象とする支援やエンパワメント活動であることが多い。女性たちがこれらの職種に集中する背景要因のひとつには、地方や国レベルで行われてきたエスニック・マイノリティ政策や多文化主義政策を挙げることができる。

このように学校や移民集住地区のコミュニティで働く女性たちに関連し、彼女たちが、パキスタン系コミュニティと主流社会を媒介する役割を担っていることを付記しておきたい。

このことは、パキスタン系コミュニティの結婚パターンとも関連する。パキスタン系の間では主にコミュニティ内での結婚が圧倒的多数を占め、とりわけ、現在もパキスタン本国から配偶者を呼び寄せるケースは少なくない。そうした流れのなかで、花嫁として来英し、社会的言語的資源に乏しいニューカマーの女性たちやその子どもたちを、2世の女性たちが支援するという構図が見られるのである。

2世の女性たちがこれらの職種に従事するための資金源ともなってきたマイノリティ政策はしかし、近年、経済状況の悪化などを背景に変化を遂げており、今後のマイノリティ政策の変化と女性たちの就労職種の関係を注視していく必要がある。

④ 労働市場における差別

中間層の女性たちが特定職種に集中する傾向の背景には、パキスタン系移民に対する排除も介在する点も指摘しておきたい。階層や居住地域などにより、差別の経験や程度は異なるものの、とくに2001年の9.11の同時多発テロや2005年の7.7のロンドンでの同時爆破テロ以降、それまでに既に存在したエスニシティや人種による差別にくわえて、宗

教による差別・偏見が著しく強まったことが、女性たちの就労や、それに対する女性たちの認識や職種の選択にも影響を与えている可能性は大きい。

⑤ ライフサイクルなど

女性たちの働き方は、結婚、出産、子育て、介護というライフサイクルの進行や、親族内で子育てへのサポートがあるかどうか、などによっても多様であり、また、大きく変化している。

(3) 女性の就労におけるジェンダー、エスニシティ、宗教の交差

以上から明らかなように、パキスタン系の2世の女性たちの就労の背景には、ジェンダー、エスニシティ、宗教などの差異や力関係が複雑に交差している。女性たちは、イギリスの主流社会と家庭、エスニック・コミュニティという複数の文脈における所与の社会的諸条件のなかで、家庭内のケア役割やさまざまな形態の有償・無償の仕事を組み合わせ、現代イギリスにおけるムスリム女性としての自己の位置を注意深く交渉しようとしている。女性たちの「働き方」をめぐる意識と実践は、そうした複雑な交渉の過程を反映したものであるといえよう。

(4) 今後の課題など

今回の調査によって、家外で働くパキスタン系女性の増加や1世の高齢化という変化のなかで、子育てや介護といったケア役割を誰がいかにか担うかがいっそう重要な課題となっていることがみえてきた。こうしたケア役割は、パキスタン系コミュニティにおいて主に女性の役割とされ、女性たち自身の宗教意識や自己規定とも不可分に関わっている。さらに、そうしたケア役割がいかにか遂行されるかをめぐる認識や実態は、ジェンダー境界のみならず、主流社会とのエスニシティの境界の交渉のうえでも無視できない。

今後は、こうしたケア（有償・無償）に焦点をあて、ジェンダーやエスニシティとの交差について検討を進める。本調査課題で明らかとなったパキスタン系移民女性の就労状況やその背景にある複合要因のほか、国家の福祉制度などとの相互作用にも着目し、ケアを焦点に、イギリスの多文化的状況の展開について考察を行う。

また、調査者は本研究に着手する以前より現在にいたるまで、日本におけるパキスタン人移住者と日本人女性の家族形成過程についても調査研究を行ってきたが、イギリスを調査地とする本研究課題から得られた知見により、グローバル化において国境を越えて多面的に展開する家族やジェンダー関係、そ

して国家内部での多文化的状況の諸課題について、日英の比較的視点の導入が可能となった。今後の研究においても、この比較的視点を発展させ、日英双方の状況を照射し、関連領域での理論構築に寄与すること、および、多文化社会の諸課題をめぐる提言を行うことを目指す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 工藤正子、「移民女性の就労にみるエスニシティとジェンダーの交差：在英パキスタン人ムスリム女性の事例から」、『青山学院女子短期大学 総合文化研究所年報』、第17号、2010、191-204.
- ② KUDO, Masako, Pakistani Husbands, Japanese Wives: A New Presence in Tokyo and Beyond, *Asian Anthropology*, 査読有, Vol.8, 2009, 109-123.

〔学会発表〕(計7件)

- ① KUDO, Masako, Constructing Families across National Boundaries: The Case of Japanese Women and their Pakistani Husbands, 2012年1月20日, The Japan Migration Research Group, Waseda University Graduate School of Asia Pacific Studies.
- ② KUDO, Masako, Keeping Track of Changing Selves: Writing Ethnography on Conversion of Japanese Women Married to Pakistani Muslim Migrants, 2011年11月20日, 査読有, 110th Annual Meeting of the American Anthropological Association (アメリカ人類学会), Montreal Convention Centre, Montreal, QC, Canada.
- ③ KUDO, Masako, Being the Muslim “Other” in Japan: The Experiences of Pakistani-Japanese Couples and their Children, 2011年7月5日, 査読有, IUAES/AAS/ASAANZ CONFERENCE (国際人類学会), University of Western Australia, Perth.
- ④ KUDO, Masako, Making Use of Religio-cultural Resources in Global Circulation: A Case of Pakistani-Japanese Muslim Couples, 2010年11月17日, 査読有, 109th AAA Annual Meeting (アメリカ人類学会), Sheraton Hotel, New Orleans.
- ⑤ 工藤正子「移民女性の働き方にみるジェンダーとエスニシティ：パキスタン系イギリス女性の‘コミュニティ・ワーク’を中心に」2010年10月3日、「比較移民

- 研究会」第8回研究会、東北大学.
- ⑥ 工藤正子「ムスリム移民女性の就労実践にみる差異の交差：パキスタン系イギリス女性の事例から」2010年6月13日、査読有、日本文化人類学会第44回研究大会、立教大学新座キャンパス.
 - ⑦ KUDO, Masako, Constructing ‘Home’ Across National Boundaries: A Case of Pakistani-Japanese Marriage, 2010年5月20日, International Conference on “Migration in China and Asia: Experience and Policy”, Institute of Ethnology and Anthropology, CASS と The International Metropolis, Canada 共催、Institute of Ethnology and Anthropology, Chinese Academy of Social Sciences (中国・北京) .

〔図書〕(計2件)

- ① 工藤正子 (共著)、明石書店、『移民のヨーロッパ: 国際比較の視点から』、2011、竹沢尚一郎 (編)、全 260 頁. 担当部分 pp. 172-197.
- ② 工藤正子 (共著)、晃洋書房、『現代社会研究入門』2010、初瀬龍平ほか (編)、全 313 頁. 担当部分 pp. 227-241.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤 正子 (KUDO MASAKO)

京都女子大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：80447458